

Title	小泉信三著 経済学説と社会思想
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.11 (1920. 11) ,p.1642(140)- 1646(144)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201101-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

傾聴すべき意見と云はざる可からず。

之を要するに本書は該博と緻密と精確とに於て殆ど比類なき産物なり。これを絶後と云ふは或は穩當ならざるべし、これを空前の著と稱するは斷じて不可なきなり。本書より或物を削ることは或は能くする人あらん、之に更に何物をか加ふることに由て其價值を高むることは斷じて不可能なりと信ず、これ本書が資料の蒐集に於て至高の水準に達せることを意味するなり。

(試みに著者が綿密を喜ぶ事の甚しき一例を擧げんか、キリヤム・ペチイの事を記すに當りて曰く、「此偉大なる經濟論者が足部の壞疽を病みて聖James寺院に對立せる Piccadilly の居室に永眠せるは一千六百八十七年十二月十六日夜の事なり。彼が一千六百二十三年五月二十六日午後十一時四十二分五十六秒 Test 河畔なる Hampshire の一小都市 Runsey に於て織染を職とせ

る Antony Petty の第三子として呱呱の聲を揚げてより年を享くること茲に六十有四年なり」と(七一九)而して高橋教授が日本人にして常に日本に在りて(一年の滯歐期間の外)この材料を蒐集し且つこれを整理し得たることを顧みるるときは教授の業績の光輝は愈大なりとせざる可からず。此書は吾人に教ふるに西洋の材料を以て西洋の事を論ずるに西洋學者必しも恐るゝに足らざるの一事を以てするものなればなり。

前述の理由によりて評者は急ぎ此文を草したり。讀者幸に紹介文の長さを以て原著の價値の尺度となすこと勿れ(十月十八日、小泉信三) 小泉信三著「經濟學說と社會思想」

東京國文堂書店發行

近世社會主義の經濟理論と正統派の經濟學とは何れの點に於て交渉あるや、換言すれば近世

社會主義は正統派の學說より何を學びしやの問題を價值論地代論、賃銀論及資本概念論の諸方面より究明せんとするのが主として本書の目的とする處である。

誠に著者が「兎に角、人が人の勞働を搾取することを不當とする思想は社會主義思想その者と殆ど同じ様に古いものであつて、同時に今日に於ても、殆ど凡べての社會主義者の現社會に對する批評の一論據となつて居(頁一)と云はれた如く近世的資本主義によつて築かれた社會組織に對する社會主義的批判の根本的基礎は搾取の二字である、換言すれば勞働せざる階級が勞働する階級の勞力を搾取する點に存するのである、而して歴史的に搾取説を考察する時は、我等は其處に二個の類別の存するを認むるのである、即ち第一の搾取説は其の價值説と何等の關係を有せざる場合で第二の説は寧ろ之れに反

して或種の價值説即ち勞働價值説と密接な關係を有せしものである、而して前者に就いて著者の興味を惹きざりし理由は、「此勞働搾取の説は特に理論的訓練を経た頭腦を俟て始めて生る可きものでない、それは貧富の懸隔ある社會に生れ、貧者勞して富者逸する事實を見てこの兩事實と因果關係に結付けて考へるもの甚だ容易く到着し得る結論であらう、それ故これだけのところでは此説は左迄特別に經濟學研究者の興味を惹くべきものでない」(頁二)の點に存するのである、次ぎに第二種の學說は之れを主張するもの、態度によつて相對的勞働價值論者と絕對的勞働價值論者とに區別し得ると思ふ、Ricardo は曩に價值變動の原因は投下勞働量の變動以外に之れを究めること出来ぬと主張したに不拘、其後彼の價值説は修正を加えられて「私の貨物の相對價值を動かす原因が二つある

事を信するものである、第一は貨物を製作する爲め必要な相対的労働量第二は労働の結果が市場に賣出される迄に経過する時間の長短である。而して固定資本に關する一切の問題は右の第二の規則の範圍内に落ちるものである(頁五十九)とあるのを見れば彼は労働のみを以て唯一の價值決定要素と認めない相對論者である、而して Ricardo 其人の價值論を社會主義説の基礎として利用したもの、中で、主なるものは佛の Proudhon と獨の Rodbertus である。更に絶對的労働價值論即ち純粹労働價值説に對する著者の態度は「A貨物のX量とB貨物のY量とが相互交換せらるゝのは、この兩者に等量の労働が投下せられてあるからだ」と云ふ純粹なる形に於ける労働價值説は今日迄のところ未だ一つも成功して居ない。而して將來に於ても成功することはないであらう(頁六六)の點に存するの

である、然かも著者は労働價值説の成立せざるの故を以て直ちに労働搾取の事實をも併せ葬るの甚だしき即斷なるを論せられてゐるのである。以上舉げしが如く Ricardo の労働價值説は單に英國のみならず、更に海の彼方にあつて Proudhon, Rodbertus 等に影響を與へ遂に Marx の餘剩價值論に及んだ如く、彼の地代説は Progress and Poverty の著者 Henry George を動かして土地國有運動と化したのであるが、更に之れが影響を被つた Fabian 社會主義は Henry George の土地國有のみを以て満足せずして一般的に産業公有論を主張するに至つたのである、即ち Ricardo の地代説が Henry George を經て Fabian 社會主義者の産業公有論に化するに至つたといふのが著者の持論である、次ぎに Ricardo 其人の賃銀説は所謂賃銀鐵則なる名稱の下に Ferdinand Lassalle によつて社會改造運

動に利用せられ且つ彼は労働者をして生産組織を組織することによつて冷刻な賃銀鐵則の束縛を脱せんことを主張したのであるが、此場合に發生する問題の第一は賃銀法則の價值で、第二は生産組合は果して鐵則の支配を脱し得る力を有するや否やの問題である先づ前者に對する著者の所論は「此法則の根本的思想を承認すれば社會の諸階級を通じて人口増殖率は所得の大小に應じて高低しなければならぬ筈である、然るに實際を見れば出生率は富裕の階級に於て特に高いと云ふ事實がない許りでなくて却て下層階級よりも低いと云ふ事實があるのである、是等の事實を賃銀鐵則は説明することが出来ない、併しそれだけでは未だ鐵則の主張者を屈せしむるに足りないかも知れぬ、何故と云ふに Lassalle の所謂生活必要費は人間の生命維持に絶對的に必要な費用でなくて習慣上必要なる生活費

の謂である、従つて高級労働者が高率の賃銀を得て居てもそれは彼等の習慣上高き生活の必要を満たして居るので、所得の金額は多くても實は彼等の生活には餘裕がないのだと辯解する事が出來ぬことはない、成程斯ふ解釋すれば賃銀鐵則は言葉の上では之れを救ふ事が出來る、併しそうすれば此法則の悲觀的色彩は全く之れが爲めに失はれ従て社會改造運動の論據としては價值がなくなつて仕舞ふのである(頁一四五)の點に存し、後者に對しては「Lassalle は全く賃銀鐵則と縁故のない手段に依て、賃銀鐵則を廢止しようとしてゐるやうに思はれる私の見るところでは Malthus の人口原則を承認した以上は Malthus, Ricardo と同じ様に社會問題に對して消極的態度を取るのが必然の歸結である、労働者の窮狀をこの自然法則で説明する以上は結婚産兒の制限以外に労働者の境遇を改善すべ

き途はない、社會主義運動の論據は立たないの
 である」(頁一五六)の結論に到達したるのであ
 る、次に著者は社會主義者の經濟學に對する
 最大貢獻の一として Rodbertus の資本團體と資
 本財産との區別、Marx 及 Lassalle の資本の歴
 史的觀念の力説を以てせられ、最後に附論とし
 て「Rodbertus の勞働價值説と平均利潤率の問
 題」を究明せられてゐるのである。

之れを要するに崇高なる著者の人格と、清溪
 の藻を敷ふるが如き透徹せる其思索とは遺憾な
 く本著によつて發揮せられ、我等をして衷心よ
 り感謝の念を捧げしむるものである、妄評多罪
 (阿部秀助)

手塚壽郎著 「ゴツセン研究」

定價貳圓五拾錢
 同文館發行

Hermann Heinrich Gossen の著「人間交通の發

展並に是れより生ずる人間行爲の法則」が公に
 せられたるは一八五四年の事なれども、著者の
 名が稍々廣く知らるゝに至りしは恐らく Jevons
 がその「經濟學理論」第三版(一八七九年)の
 序文に於て數學的經濟學の先驅者として其學說
 の一端を紹介したるに始まるものなるべし。其
 後奧太利派の諸學者輩出してより、Gossen を口
 にするもの漸く多く、享樂遞減、並に限界享樂
 均等の二法則は(手塚氏の譯に従へば)同一の
 享樂を間斷なく實行するときは享樂の大きは漸
 次減少し、遂に飽滿するに至る。「諸種の享樂
 に就き選擇をなし得れども其らの總てを享樂し
 盡す時間を有せざる者にして最大量の享樂を得
 んとすれば各個の享樂の一部分宛を收得するを
 要し、而して各享樂の終止時點に於ける各享樂
 量を均等ならしむるを要す。」は共に Gossen の
 名を以て呼ばるゝに至れり。我邦に Gossen が紹

介せられたるは何時の頃なりしか。單にその書
 名の擧げらるゝとはこれより先きにもありたれ
 ども其内容に言及せられたるは恐らく明治四十
 二年福田博士が「經濟學講義」(四〇〇)の内に此
 書の數節を引用したるを以て嚆矢となすべし。
 然れども其後 Gossen を論ずるものは甚だ少な
 く(山口正太郎氏はその少數なる研究者の一人
 なり)一八八九年伯林の書肆 Passer の翻刻に
 係る版本は入手決して困難ならざるに拘らず
 (同書肆最近の目録によれば價七馬克五拾片な
 り)その廣く我邦に行はれざるは事の主なる原
 因此書の難解に在りしなるべし。十九世紀中に
 現はれたる最も獨創に富める經濟學書を數ふる
 ものは必ず Gossen を逸す可からず。然れども
 十五世紀中に於ける最も難解の書を數ふるもの
 も亦此人を逸すべからざるなり。原本は細字二
 百八十有餘頁、目的なく、章節の區別なきに加

ふるに在來の慣用を襲踏せざる新術語の頻りに
 用ゐらるゝ事は讀者の疲勞を甚だしからしめ、
 更に加ふるに論の要處に到る毎に必ず援用せら
 るゝ無數の數學式は一見無素養者の膽を寒から
 しむるに足れり。然るに今手塚氏はたゞにこの
 難解の書の邦譯を試みたるのみならず、「ペーコ
 ンがクルノー」を英譯するに當り幾多の數學的運
 算の誤謬を見出したやうに權威ある書物にも數
 學的運算の誤謬なきを保し難きが故に、……ゴ
 ツセンが省略した一切の運算を行つて見た」而し
 て「〔内に註解を加へ〕余は此註解の精確なる
 を信するが故に讀者は自ら筆を採りて試筆を行
 ふ必要無かるべしと思ふ」と記せり。これ實に
 進んで他人の回避せんと欲する衝に當るものに
 あらずや、評者は手塚氏の意氣と苦心とを多と
 せざる可ざるなり。

本書中最も重要なるは享樂増減、享樂増減よ